

説明書

治療・検査の名称	尿管狭窄、尿管損傷
----------	-----------

説明項目

1. 診断名（病気の名前と進行度）

尿管狭窄、尿管損傷

2. 病気の説明（どこに、なにがおきてどうなっているのか）

腎臓で産生された尿は腎杯、腎盂を通過してから、尿管という細い管によって膀胱まで運ばれます。この尿管に狭窄や損傷などの問題があると、尿がうまく流れず腎機能障害を起こす場合や、尿が尿管のそとに漏れると疼痛や感染症の原因となる場合があります。

3. 目的および必要性（なぜこの方法が提案されたのか）

目的：開腹手術にて尿管の狭窄・損傷を認める部位を切除して、正常な部分の尿管をつなぎあわせることが目的です。

必要性：放置しても自然治癒するはありません。

4. 方法（なにをどうするのか）

全身麻酔で手術を行います。体位は患側を上にした側臥位です。

尿管を剥離して狭窄や損傷がある部位を切除し、正常な部分の尿管どうしをつなぎあわせます。尿管吻合部を安静に保つために、吻合のときに DJ カテーテルを留置します。

5. 受けた場合の予想される経過（期待されること）

手術翌日（または術後 2 日目）に尿道バルーンを抜きます。腎機能が安定しており、感染症などの合併症がなければ退院となります。DJ カテーテルは外来で抜去します。

6. 危険性および起こりうる合併症について（心配されることや副作用）

・出血：通常はほとんど出血することはありません。尿瘻によって生じた炎症や、尿管損傷を来した原因などによっては癒着がひどくなる場合があります。そういった場合には、出血量が多くなり輸血が必要となることがあります。

・他臓器損傷：手術操作中に他の臓器（腸、肝臓、十二指腸、膵臓、脾臓、胆嚢、横隔膜、血管、神経など）を損傷することがあります。尿瘻による炎症や損傷を来した原因によっては高度な癒着が生じるため、特に注意を要します。手術中に損傷が明らかとなった場合はすぐに適切な対応をさせていただきます。手術中には明らかではなく、数日経過してから損傷が分かることもあり、再手術が必要となることもあります。程度によっては治療に時間がかかり、後遺症が残る場合もあります。横隔膜を損傷した場合は胸腔内にドレーンという管を留置することがあります。

- ・感染症：肺炎や尿路感染症など手術に関連した感染症になることがごくまれにあります。
- ・尿管吻合困難：癒着が高度な場合や、狭窄部位や損傷部位の距離が長い場合などに尿管をつなぎ合わせるできないことがあります。その場合には背中から腎臓に管を留置すること（腎瘻造設）や、腎臓を摘除することがあります。
- ・肺血栓塞栓症：まれではありますが、術前から下肢の静脈に血のかたまり（血栓）がある場合や、長時間の手術の影響で血栓が発生してしまった場合に、血液の流れに乗り、肺に到達し肺の血管をつめてしまう病気です。太い血管につまったり、大量につまったりすると突然死することがあります。術中術後に予防処置をとらせていただきますが、それでも発症することがあります。
- ・肝腎機能障害：麻酔、手術で使用する様々な薬剤によって肝臓や残った腎臓に負担がかかることがあります。必要であれば薬剤投与、透析などの処置を行います。
- ・創部感染：手術創に細菌がつくことで膿が出たり、創が開いたりすることがあります。必要であれば切開、再縫合する場合があります。
- ・創部痛：術後しばらく創部は痛みます。皮膚切開のときに細かい神経を切ることを避けることは不可能なため、知覚異常や知覚過敏、神経痛などを自覚することもあります。多くは時間が経つにつれて経過しますが、ヒトによっては数カ月以上続くこともあります。
- ・術後精神障害・せん妄：高齢者、大きな手術を受けられた方、手術に対する不安・恐怖が大きい方では術後に精神異常をきたすことがあります。一時的であることがほとんどです。暴れたりして術後管理に支障をきたすようであれば「身体拘束の同意」をいただくこともあります。
- ・併存症に起因する合併症：必要に応じて術後に併存症の治療を行うことがあります。特に心臓に持病（狭心症、心筋梗塞、高血圧、不整脈、心不全など）がある方では、手術のストレス、痛みなどで心臓の機能が悪化することがあります。重篤な心筋梗塞、不整脈、心不全では突然死につながることもあるため、術後は心電図モニターを装着して管理します。

7. 合併症発生時の対処について（費用負担もふくめて）

合併症改善に全力を尽くします。緊急の合併症の際は迅速な対処を最優先し、その結果として説明が対処の後になる場合があります。合併症や偶発症が起こった場合、治療に最善を尽くします。予想される合併症についてはできるかぎり説明いたします。しかし、極めてまれなものや、予想外のものもあり、すべての可能性を言い尽くすことはできません。なお合併症が発生した場合も、一般的には医療保険で対応いたします。

8. 受けない場合の予測される経過、代替手段（他の治療法）

尿管狭窄や尿管損傷は放置しても治癒することはありません。

9. 説明内容の理解と自由意思による同意承諾およびその取り消しについて

説明を十分に理解した上で、手術についての同意をご自分の意志で決めていただきます。いったん同意をされた場合でも、いつでも撤回することができます。やめる場合は、その旨を担当者へ連絡してください。

この手術に同意されるかどうかは、患者様の意思が尊重されます。同意されない場合でも、

不利益を受けることはありません。

現在の患者様の病状や治療方針について、他の専門医の意見を聞くことも可能です(セカンドオピニオン)。その際は、ご相談ください。必要な資料をご提供いたします。

10. 緊急時等

担当医が緊急の合併症と判断した場合、事態の改善にむけて全力を尽くします。

11. その他

術後創の痛みは麻酔科と協力して、改善に最善を尽くします。

術者： _____

説明者

説明日： 年 月 日 施行予定日： 年 月 日

診療科名： _____ 説明医師氏名（自著署名）： _____